

二十一世紀と『法華経』の精神

季 羨林

あらゆる仏教經典の中で『法華経』は極めて重要な地位をしめている。しかも旅順本は断簡ではあるが、重要な意義を有する。なぜなら旅順本は数多い写本の中にある。初期の写本に属するからである。『法華経』が包含する甚深の意義については、これまでも多々論じられているので、ここで繰り返すことはしない。まもなく到来する二十一世紀における『法華経』の重要な意義について論じたものはいまだ披見していないので、試みに愚見を述べ有道の士に教えを請う次第である。

まず、次のことを説明しておかねばならない。私は仏

教を大変尊重しているが、一仏教研究者にすぎず、仏教の信徒ではない。いかなる宗教の信徒でもない。ゆえに、以下、私の観点を論じる場合、一学者の立場に立ち、科学的に实事求是的に論じるしかない。創価学会名誉会長池田大作先生及び会長秋谷栄之助先生、そして他の副会長も私のやり方に同意してくれるものと思う。なぜなら、仏教は人が嘘をつくことを許してはいないからである。

私は、人生にはこの世において、必ずうまく対処していかなければならない三つの関係があると思う。一つには、人間と大自然の関係（天人関係）、二つには、人

間と人間の関係、換言すれば社会関係、三つには、一人の人間の心の中で思想と感情の対立（矛盾）が表れたり消えたりしていく関係である。

ここでは、一番目の関係についてのみ述べるにとどめる。その他の二つの関係については、これから論じようとする問題とは無関係であるから、いずれ別のところで論ずることにする。

厳密に言うと、人間も大自然の一部である。しかし、比較的低いレベルの動物界を抜け出て、人間となって以後は表面的には、大自然と対等の立場に立ったかのようなのである。しかし、人間の一生の衣、食、住、行（交通）に必要なあらゆるものは、みな大自然から求めねばならない。このあまりにも簡単明瞭な道理は、少しく考えればすぐに分かることである。

しかし、それではいったいどのようなようにして大自然からこれらの人類の生存に必要なものを取り入れるのであるうか。この点について、東洋と西洋とでは少なくとも思想の面において、全く異なる考え方が現れている。西洋は、自然を征服する（と）（to conquer the nature）を主張

した。その意味するところは、強制的かつ強引な手段を用いて大自然から奪い取るというものである。では、東洋はどうであろうか。中国、日本、インド等の国を含め、すべて次のように主張する。温和な手段を用い、大自然と友達になり、理解を重ね、そして大自然の神秘を完全に理解してから、大自然に対して求めの手を伸ばし、我々人類が必要とするすべての物質的なものを手に入れるのである、と。中国のこれまでの哲学者のほとんどが「天人合一」を主張しているが、私の新しい解釈も同様である。中国宋代の大哲学者である張載が『西銘』の中で「民吾同胞、物吾與也」（人民はすべてわが同胞であり、物はすべてわが仲間である）と述べているのもこの道理である。インドの伝統思想「梵我一如」（Brahmātmaikyam）が言うところも同様にこの道理である。

『論語』の中に「天何言哉！（天何をか言わんや）天何言哉！」とあるが、天（大自然）は口がきけない。しかし、何かの恩恵を授けたり、懲罰を下したりすることができ。もし天を征服し、天を敵とみなそうとするならば、天はそのような者を懲罰するであろう。このような例は

枚挙にいとまがない。西洋は、産業革命以来、大自然を「征服」した結果、確かに人類に少なからぬ福利をもたらした。このことは人々の周知するところである。しかし、同時におびただしい有形、無形の災厄をもたらした。たとえば、環境汚染、生態系の均衡の破壊、オゾン層の破壊、種の絶滅、人口爆発、新たな疾病の発生、淡水資源の欠乏、人と人の間の矛盾や憎しみの増大、異文化の衝突等々である。上述のこれらの災厄の中で、もし一つであつても適切な解決をみなければ、人類生存の前途は脅威にさらされるであろう。私は「人類の終焉はまもなく到来する」という説は信じないが、上述の様々な災厄に対しては、我々は見て見ぬふりをするわけにはいかない。

『妙法蓮華経』の中に包含されている内容と道理は、奥が深く、幅広い。私のような門外漢の「部外者」は、あえてむやみに詳しく論じることはいらないが、創価学会の三代の会長の解釈によれば、『法華経』の基本思想もまた東洋思想である。初代会長牧口常三郎は教育者出身である。彼は、次のように述べている。「唯一価値と称

することのできるものは、生命だけである。その他の価値は、ただある種の生命と連携する時に成立するのである」と。第二代会長戸田城聖と牧口は、日本の軍部の侵略行為に激しく反対し、投獄された。戸田の獄中での「悟達体験」は、『法華経』を中心とするものである。第三代会長池田大作の著書『人間革命』の中では、戸田が『無量義経』の三十四の否定句（『大正大藏経』第九卷三八五頁上参照）を用いて表現されている仏身の部分について何度も思索を続け、忘我の境地に至り、たちまちにして「仏とは生命である！」と悟ったことが述べられている。戸田はこの経過を『生命論』と題する論文に書いているが、「小宇宙」としての自我の生命と「大宇宙」が一体となった「宗教体験」は、彼を瞬時にして「宇宙即我」「我即宇宙」の境地に悟達せしめた（川田洋一氏の論文『創価学会の思想的基盤——『法華経』を中心として』参照）。このような思想は、中国の「天人合一」とインドの「梵我一如」と全く完全に同じものである。

先に述べた西洋科学技術による「自然征服」を核心とするやり方によって引き起こされた災厄を消滅させよう

とするならば、『法華経』も含めた東洋思想によらなければならぬ。二十一世紀及びそれ以後の時代においては、その思想を我々人類全体の行動の指針として、はじめて人類は救われるのである。

東洋思想のみが人類を救うことができるのである！

(きせんりん・北京大学教授)

(本稿は、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡(写真版及びローマ字版)』の「巻頭言」を転載したものです)